尾張廼家苞

五六上

愛知県文化会館

505252

A911
1
2-5-1

尾張廻家卷五

新古今集

雜部上

入道左兵衛督藤原定家朝臣

後成恩寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ぢ　はらてを庭の跡　なし　巻　を　ゆ　の　村　は
庭の雪の村はなを巻の中を跡とゝめけり外
はらてを人の行をきゝ巻をとゝめて人ゝ中をぬきあり
拾遺三百首もなりといへとも中をもとゝめて
金葉二　二度まれてとゝのゝ山ちかくのやき奇公方の
きれたる雪に乱れあり　はるの夜の秋の月を
けて跡なき庭ふかしやまあしてをれのうけよ
うしかれ　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]

雅經

別

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世をのがれてな[illegible]歌よみける[illegible]花のこと

後成

今[illegible]ふるさとの山の花をとてやのゆきもとりわけ
世をのがれてしかの家[illegible]
世をのがれてしかの吉野の山のようなる住[illegible]

入道太政大臣家歌合

[illegible]

[illegible]

同家の百首歌よ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三月八日　上方へまかりのぼるとて　法印幸清

世をいとふ吉野の山の桜の花　ながめ馬つきのうりや吉人

題しらず

世をいとふ吉野の山の桜の花　ながめ馬つきのうりや吉人

三月八日　上方へまかりのぼるとて　法印幸清

世をいとふ吉野の山の桜の花　ながめ馬つきのうりや吉人

題しらず

世をいとふ吉野の山の桜の花　ながめ馬つきのうりや吉人

三月の下旬　上方へまかりのぼるとて　法印幸清

世をいとふ吉野の山の桜の花　ながめ馬つきのうりや吉人

題しらず

世をいとふ吉野の山の桜の花　ながめ馬つきのうりや吉人

百首歌合 時 忠良

千五百番歌合 有家朝臣

五十首歌合 時 慈園大僧正

世を経て　初句は藤原氏の本姓　後句は源氏の本姓　同じ本姓ながら　僧正俊恵　藤原氏
なりてはなほ人の中にあるべし　摂政関白にもなる人と
同じ流なるとぞ　すなわち源氏の本流なり　つきはなれ　藤原氏の本流なれば
なるべし　我身を世に何の勤もなきものを
歎きたるかな　世を恨　縁を求　とかいなる　いたづらに　三つの
況論　恋　なり　たとへ　たとへ　なり　なり　なり　なり　なり　なり　なり　なり
なり　なり　なり　なり　なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

崇徳院百首哥よみ給ふに

いふして神さびわたるやまゝ雲ゐの月に隔てゝ[illegible]

[illegible]

崇徳院の御時の哥

[illegible]

文治のころほひ百歌よみ侍りける時の哥

よめる　　左近中將公衡

[illegible]

三代の御時の哥合

百歌哥　　二條院讃岐

[illegible]

百歌哥　　撰　改

月見をたゞ[illegible]

上句は山のかたちと長しといふ心なり長月のころの
雲の間てふ上句はそのことをかねて高の月を待なる
かまくらもとくあるべしとよまれしはけりのいふ
心なり　或人の流月を月のかたちとしるしとしるしとしるし

[illegible]

同家に奇屋山月花屋業信

山陰をおくれる雲のわたるかつらの方の月

[illegible]

[illegible]

和尋法歌会深山暮月　長明

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

熊野にまうでたりし時の歌の中に

秀能

[illegible]

月すみてくものうき雲ちりはきえてこ山のたにはけのあるし

雪とこ山のたにはおしてはしへ陸雲のあり[illegible]

わしもとをたゝかしてやすらしきえ[illegible]雲の残らすはら

てはなをてくこをてくこを寄た山の梢をたゝかはるはるはる

とみはりたゝかしとはかつこ又月のすむ嵐の

雲を吹はらへあかるくて月のすみなをさきえ

嵐をこ山のたをはらはらはら

上下かつてしてこそ上句八在俗のしれの者を知らるべ
上句八神仏陵を知りてしてすべし月花のやうとそ
月のうつくしさをほめてあまの都をいとはぬ者なり世を
二句の清八一本に清とあり。とかくなれハほめ過れ染と
ふるく清の方を叶申ほく清るとハ清るとハ清る月
清るきよくハなくんハ清りしてほくハ清るとハ申なり。これハ清
なりとハ清るとハ清るとハ清る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず　源光行

、いかなる人のこゝろぞの月をこそ何をこゝろの身のはてにせし

三月のこゝろは八月をこゝろにかけてこそ月はこゝろ深くなれ

千五百番歌合より　二條院讃岐

身はたゞの月にあはれをかけしかはこゝろ深くなるにこそ

たゞこゝろにかけるとしへぬ事をしかるに悔しかはこゝろ

世をそむきなんとすりし人のもとに月をみて　寂蓮法師

有明の月にあはれをかけしかはこゝろ深くなるにこそ

月山にかたぶくころの人のもとにこゝろ深くなるにこそ

長月の有明の月山にかたぶくころ　性因親王

、長月の有明の月山にかたぶくころ

[illegible]

題一　式子内親王

有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

[illegible]

春日社歌会　晩月抵改

天の戸をいでしかたの雲ぬけて神代の月のかげぞ残れる

春日の神天児屋根命の御事なり[illegible]

[illegible]

[illegible]

古大將志經

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つゝ一名

法橋行通

、あやしくそ（ほゝ）月のてりたし昔こそ夜や更けぬ

月のはきゝ和しかりしかはへる法師と行通ハ子月のてりすくれ
れ和しかりしの和歌よりあはせかりてかのつゝりあやあんとゝ西行上
人の和歌にてかのつゝり
しゝ上人感嘆のゝゝ

故郷月　　麻呂

、なつの宮ゝる月とてくんなるゝ山ゝ

おなじてはよ五月のころ信濃ゝ郡ゝりてゝある所ゝ
ゝるゝこゝ信濃ゝ月を宮ゝる月とてゝやゝ

和歌ハ弘仁海を月無月大僧正

、和歌の浦月のわかなのはとまふゝ鶴の羽を出き

三ゝ月ハ月のしゝかの波のきすまふゝ和歌ハ秀句ゝ宿のあしハ白
詩ゝ夜宿侯子なを竜中鳴ゝ

ゝ宿ゝ和ゝ月のしゝかの波のゝ
上ゝ中ゝ上ゝ宿のゝ

定家卿詠

ゝ和ゝ月ゝ神の月ゝ

ゝ和ゝ月ゝ神ゝ月ゝ

秀能

ゝ月ゝ

ゝ歌ゝ

ゝ月ゝ

事なり。元々後鳥羽天皇の御代に、神を崇め、仏を尊ぶ者多し。三乃八誓
の神を崇め、仏を尊ぶ者多し。三乃八誓
は、月の神、月の神、月の神

雅経卿の人の国をとれりしかば　[illegible]

[illegible]

[illegible]

あれはてる秋の庭下七草ばかりして落葉人なの夕雲

下句今はたゝあれはてる庭の我あるこゝろなんとせいまあれはんと夕れいなのあはれらしてこれは縁あり死もよもあわ夕れをこの縁とハ秋風をこの縁といふこと。

縁なきあわれ夕れをこの縁とハ秋風をこの縁といふこと。

いかゝれと夕れよるとハ似今しくて昧且西干七ちハ似今しりすくもも似今きこゝろ夕雲ゝ夕雲ゝ夕雲ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山里に住侍る頃はべりし朔日中納言顕長卿
もとにつかはす　後徳大寺左大臣

、春ゆくあくがれつゝ世をかなしみ侍りしかば

山里にて花の春をくらしてはべりしかば
ゆくはるをとゞめかねてはべりしかば

左大臣

、世中のあきをそめはじめし頃今あしの葉のこがれする

わきけてそ秋をそめはじめし三河の八橋にて今八ぢはしにおなじ所なり

百首歌奉りし時　土御門内大臣

、朔日ごろ河の氷やとけそめぬるなどしてこゝろ

戦競に和歌所にあるべきよし仰せられしかば
一首のこゝろをよみ侍りしを用ひられ侍りしとき

寂勝四天王院障子のあふみ川きしなる松
家隆朔日

天の川のあふみ川のほとりに木も水の下に春ぞ花咲かりけり

三の月の十五夜の月の出るまつ山の上にいでぬるかな

いはの上にはまつをつきてとりいたすなり　三の月の
うれしかれもとふまとこそ　結びたる春の人をいたれ春
をこそまてとふ人なしとうたはれし春の山のこゝろをよ
ませたまへりしとかや　ことに春の山のこゝろをよ
ませたまへりしとかや　ことに春の山のこゝろをよ
ませたまへりしとかや　ことに

のこりなくてき世あいなれ　やまとうつかりと
ものいつきさくるかるそ　れき世とあんと

雪よせて述懐のうた　後素

松島はれてくれなるあさぼらけ　なにぬなきの月とさくん

なきさ月とそへたりてくに雪よりて梨てこそ
よせたりて三月のまつ　おれとやすみけるわくれ
いしまちかきこゆかり　あれりたはもてこそいふつきの
ていりてそ　ふなんし舞るしてこそしへきをらししてもめるを
ものすりしいらし　らしいらをそを殺ちんいたいひりしそ殺のむ
ねなりしをする　ぬまとしし舞をそをすいそ　なくる
とらしいまれるを　をなしてなるへ

題しらず

老ぬるも又とあくへ同年よ減の長たりあつるれ

下ゆ殺りしをそ　同の地をたるこそてまれなる
はしをそんゆくを　同の神をしるを料殺をそれし
その殺同をたるを　あをを歌いり年よたしく
なるいへをそをを　なれしをそをいをを殺いりをし
へ川人をを殺をを　同ををしの巻をしの数神ををいを記しら
をの下らんをたむを　なををををををの殺をを料の地を
殺ををををををを　ををををををを

雜歌中

なりの院の後徳大寺殿に

実家の公やまこと[illegible]

[illegible]

家[illegible]

[illegible]

[illegible]

眺望の人々　　寂蓮法師

、わたの原こぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

海人の釣舟のわたの縁よりよるべなきものとなり

千五百番歌合　　藤三位季能

水のほの去年の雪ぞ消えぬとて人はけぶる市の里風

風よりはなし。去年の雪のこゝろにはなけぶる市の里風

きこえ。しかるに風よりはなけぶるとは雪の事にて

あるべきなり。風よりはなけぶるとは雪の事にて

いふまぶえなれども雪の事にすれば。あのほのぼの北の

方にしかるべきなり。舟津岡熊野郡熊野神社あれども熊野

を熊と誤れる本なりと人てら財部も同国なれども

てらんしるべきなり。既に熊野郡とあれば

又郡もなくれば

眺望の人々

秀能

今はつゝてゝ。しゝてもいくせんなるの浦風の夕々しのぶ

物方ゆかしてとゝ。一説のまゝなるの浦風のタ々しのぶ

なれば。なをしのぶをよいてゝ。三三月我身のもいろなるべき小此

人なるの浦風小であるべしかるにいく。なるの浦風八橋

洲岡之述懐の寄

六位六位なるの人岡まりたるの人の名を寄もの海河を詠のこと

定めりしこゝ。人名を経とうの人の名を寄人名をもの海河を詠のこと

ほるべきなりしも定難し。又歌枕と定なるべし。偽とあるも難かし。

百番歌合　　藤原

、きぬ〻ぬれ袖をしぼるまでの海の蜑のかゝ火たき侍りし

神の風う和ぎたかりしかは西へのりかゝるとき
はりまのくにのみなとにふりもかはりみなとに
海邊霞　家隆卿
みちもせに霞のこもるすまうの浦なるひとはうらの浦
みちもせに霞のこもるすまうの浦なるひとはうらの浦
なるへ網のうらなるひとはうらの浦であるとよめる
太神宮ゝたまつりの百首歌の中に若菜　後成卿
ゝふとやゝ後業をしたゝ行幸の浦の餐のなとめと
ゝふとやゝ後業をしたゝ行幸の浦の餐のなとめと
のまに師の浦の餐のなとめ八かの日とて後業とつゝて祝するなり
住吉詠歌百首　西行
住吉山ゝき世とゝ思ふまてゝいとゝ
三月の中に都をとゝまりて世をすてゝ
もとの縁のうへにて　トウムハ
第四修行ゝ行ゝ
題しらず　恋歌
世中をうたくいとゝ歌ての個を身のなりしてて
人たくゝゝなりての人を執着もる世中をいとひ
本とゝ思ひ
へ
ゝ
ゝ
ゝ

風をかぶりて月の影の空きそりへたるなり世代物語三句例の月はすみ侘たる山の端にかたぶきて
てきハつよくきこゆ　トロ　ものしのりへたるなりあるいハ上なる哥の
いまをかり我身なりんと思ふて今の世くへたる
ぬ事をなげかしく思ふ　くのやう　いるすゝ山の歌なり　化物のつゝいてまんいりまんのかたりけ
んもあれハ　世の哥とゆうていく　はるかの　とてきくんくまれハ
他ハ伝の哥ときくくまれハ

平貴歌ものゝ時　慈円大僧正

たゝ一すじたる世の月をはなれぬ人のわくゝみなれの山
物語世の中をあきなるを去ぬ山の端ハたゝ
てとゆくゝ　なるてたる世くいへる

同のつきもわれ有いけるかぎりハ　のかたちたゝかうくゝ　二三句ハ世の戸
をはしるかのそたる仏の乃を観念する　世のなをはし
らいたるかのかをくるはしハ世の名のなを　てこのかた
弟子ハ今ハ世ハ三界をかりの家なるくゝ　トロハ芳のいとき世
すつるとて古師の山をこのかたしをしいねもし
世の中をあきなるをはしるかりのそて仏をを観念す
るくゝいつくゝありてもするくゝ古師の山をくゝ　一そ
ハ世をはしるかりくゝ世の名をはして山をくゝのそんしけて
思ふくゝ　ハ　ハ　ハ

[illegible]

藤原家衡朝臣

いとしてもたいとつき世をうの芳野のくの秋の夕暮

[illegible]

千五百番歌合　通具卿

つもりにかれなくはてもなく秋の庵のあらの風のあれ

[illegible]

寄覚上人家五十首歌　南居

有家朝臣

誰[illegible]

[illegible]

もとのさかりにてはあれども風はふきあらぬ人はなかりけるとかやいとかなしかりけるとかやはかなかりけるとかやはかなかりけるとかやはかな

西行

山おろしはこそたちそうらいしもすそ六長八尺ばかりにて
山ぶしにてあるしるまふ世をうつ世をわる人の山の坐を
世のうちてあるしるしいふ心をかふるもせそ
ひとでやあるしなるべきよあすとく
山ぶしすまねどいまはしやをもして入る月もあるふ世ふ
ミ文ひとを世のうのうにて山ぶしそうそうはきぬる世の
人の道とまて住ぬいまるのきやがと人情もしてと
入ぶるとうふきとを方へ　くのやしぶ世ミ文ふ

山家送年　寂蓮

立ぶてつ方ふるとうかの岡のゆきふのとなりうるふ
ゆとはきまはしかのふきまふ立のしてたわよかち
てとうりの山のなりぬとうるとの題の送年と
いふきをめつうとくとまたり立ぬくはちをと
いかるて山家のきうたりのこ八庵とうり
きしまふのきとをたりしまゆきふのを
たりかせてうしけふかとふけりの
ふるもあすうの岡とふかのたりしたあて
ふるりてゆきふのとふりしたるうし　ふのをは
ふ本をれてふるもうとまふのうとふきふあと
なりしうふのはてふふこの山花と字八たり年とと

後鳥羽院御歌合に山を　太上天皇御製

行く山の行くへもしらぬ雲にのみ世をへだてゝ月ぞ入りぬる

なに山の梢ゝのあらぬ雲ぞ世をへだてゝ月ぞ入りぬる

あるべきわとはいふとも世の人に世をへだてゝ月ぞ入りぬる

きゝ入れし賢人隠士ぞ世を捨てゝ月ぞ入りぬる

おもて用ひてきゝ入れわるべきわとはいふとも世を捨てゝ月ぞ入りぬる

とのゝ給へるなり　なにはなきものゝ世をうしなはるゝを

逃げて入るべき世をうしなはるゝを　天下民庶をうしなはるゝを

百首歌たてまつり　二條院讃岐

なにしてか行く末を行く山にまかせ捨てゝ月ぞ入りぬる

行くへなくて行く末を行く山にまかせ捨てゝ月ぞ入りぬる

けるなり　行く末を行く山にまかせ捨てゝ月ぞ入りぬる

行く末を行く山にまかせ捨てゝ月ぞ入りぬる

行く末を行く山にまかせ捨てゝ月ぞ入りぬる

[illegible]

[illegible]

隠者のすまひ上ゐ人なれども世を捨て隠れ住まんとする者なれば
[illegible]

春日社歌合　右風　有家朝臣

我なりしかふるあとをとはわよ神さびにける庭の松風
我なりしとをとなりそしらばかけそわ

いふさこそ　[illegible]

[illegible]

題しらず　西行

誰すみてあくるしら山里の雨ぬきもたまれの宮

[illegible]

、[illegible]

[illegible]

殿冨門院大輔

、[illegible]

後白河院　栖霞院寄[illegible]

宋[illegible]

[illegible]

[illegible]

又は夏まつの三月の事のつきて昔の法をあて、この伝をのべ
給ふと、又今嵯峨にて三月尽の事ふるし、その比八月の
比なれば夏さうの山のふもとの古木の事
なるべし、世月のふるさとにてあるべし、

最勝四天王院の障子に布引の滝をかきたる所

有家朝臣

久しかれ天にまします夏ごろも雪井にたてる布引の滝

はるばるとふ日を曝すゆ、そ夏の衣ぬしもきさ夏ごろも雪山里をよ
おもてはるばるしたる古の風俗なれば、そのそこ布引の滝八天竺夏
衣を大空とかけるなり、ここは夏ごろもとは、布引の滝をわれ、何山姫
の布はるばるとかけるある山とは安なれば、そしてとわて、
天にまします天人あるべし、又は雪井は

はるばるとはいふまでもなくとのこともあるべし、
夏ごろもとは夏の山陰の絵の歌、雪のふるまでは、
夏の頃天にかけるなり、又は雪山里をおもてはるばるとは、
又雪井はいかなる天竺のいとをもて織りたる布にふるの
ちはるばるとはかなのいとをもんとしてそのたくひの絵
のごとく又天のとりかけしわざもあるべし、雪ちりくる
しかれば山のいとさきとなり、

天の川のほとりにて　摂政

しらしきの天の川原を渡りもて流れきし水をなかしけるかな
流れきし水をもて結びたるなり、なかしけるかな
とをもかけるなり、

[illegible]

題しらず　慈鎮大僧正

山ぢまもひとりのなかめそなれるかの世まとひの人のなかをは
結ぶ草ふかくおもひのこしもなかれしかしこの二句
ひとりしの人をとあくまて我わ外山のさとわ
住人のなきさとしまりのさとわつかのてハこ八世中のことを
一そのこ世をのこして山ぢ住人のこ世の方をなるべて世りの中をして世
住人のこ世をきまりをもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世

西行

山ぢ示ほの世いとんなとるかはしく過ぬ山ぢ住人

一首のこ山ぢ住人のこ世をいとんなとるかはしく過ぬ山ぢ住人
きまりをもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世
憂世とハこのこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世
哥とハこのこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世

、山ぢ住人のこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世
人のこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世
人のこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世

慈円大僧正

草の庵をいとしてもなれしつゆの命はかりとかきりわ
上ハ人のこ世をもてをぬ人のこ世をもてをぬ人のこ世
世を厭ひて草の庵をこりてはかりのこ世をもてをぬ人
うる限りこ命のこ限りをもてをぬ人のこ世をもてをぬ人

西行法師

[illegible]

家隆朝臣

いにしへの若の浦なる月なれや海の月をもとるべき
世をこめし心はあれどうつるふる世にいまこそ本をとは
よけれ

入道前太政大臣

夏歌

山家式子内親王

今我れ有の枝の枝の庵ぞよつきめでたるつき池
大の名陸奥の国の所の名の四月しるしの
みなるべきあるいふこころ今は月とぞいく此歌は伊勢物語
三月ばかりとあるとこの
きもきもかへ若ぶきしたれる枝ともなりあり
もと他所のふるさとより来かるべしとの枝ぶ神といくばくの神と若ぶ

き神としふべき仏つかしの若の衣とふ若の衣とこれをいふ
なるべし若の衣いとこそとあるは師の若れ
とのまとしとは若の衣いとんん若ぶき神もかりいとさ
此下句若の衣きてとしつるべき効をいふ事なる今
世にはいかなる神とつるいかにいかにいかなる又いく
なりてたとへばすべき効を若ぶき神たとへばてえとあるやうの人を

小侍従

志きこえしいにしへの若ぶきの神はすきにけりあれ神
首とこそあるりかくあひてはあるとあれ
ぬれ神の人はりてがのこそしいにこそ
しくあるまたの人の若ぶきとこの若ぶきとこの若ぶきとこの

[illegible]

慨改

忘れ草の人々ゆかしく山河のうるはしくうるはしくうるはしく
忘れ草の人々と忘れ草人々を思ふ必ずしも人々と下思ふ
つるあのうるはしくうるはしく春の来る時のうるはしく
事よ人々忘れ草人々と忘れ草人々を思ふ必ずしも人々と下思ふ
なるほどなるき春なり山路は花なり　春はなるほど春なり
なるほどなるき春なり山路は花なり　春はなるほど春なり
なるほどなるき春なり山路は花なり　春はなるほど春なり

なのりそ　ゆ

山家　　慈覚大僧正

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草も かれぬと思へば

冬ごもりのきこ結ぶ[illegible]ぶくきりたてたてこ[illegible]ぶくこ[illegible]葉を
のこれてくるの[illegible]山ぶしのすまひを大きさ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]

後鳥羽院御歌

武士内親王

なのりそのたちしほれ[illegible]ぬ遠くなれ[illegible]ぬ[illegible]
結ぶとい[illegible]
貴のたちと[illegible]

一そのきこ仙人の基をうつをとて斧の柄のくちぬる世をきこ[illegible]
久しくてきこ[illegible]
今又[illegible]
[illegible]世をこ[illegible]

[illegible]

[illegible]

されば什どいへる詩に園の竹樹を植て世中八卦の塚の間をわかれ竹の絶るを一首のこゝろ園を作る者世中の人をまねきて同世中花いろきまつ咲こゝろをいうまでもなくこゝろとこゝ

題しらず　慈円大僧正

園の八重のあるゝ花身ありとへてこゝろを山ちの風

園の八重とは園のようにてあるゝ花をふけば山家にて花くゝふけ。あるゝ八隠者のこゝろにて園の隠者は世をすてゝ空しく花をこゝろにかけ人に来ず山ちの風のこゝろにかゝるとへ詩隠者不遇とゝ行長を甚多上句虚字の風詞あり

西行

古畑のそばの柴ゝる柴の戸ゝ柴のすゝき久しく

古畑のそばの柴ゝる柴の戸ゝ柴のすゝき久しく　古畑とは家の中ゝ畑とあるゝ畑の中なる柴とてあるゝ柴ゝ柴の戸ゝ柴のすゝき久しく上句重ねる文字山畑の秋さびしき

山ちのこゝ岡ゝ分てこしるおのはひとゝ玉のを拾

物思ふ者小山ちのこゝ岡ゝ分てこしるおのはひとゝ玉のを拾　三月の中ゝ山ちの

のすゝきとあるをへて　まゝ気にて山けのこゝろ也。浩しにはあるこゝ。はれるこゝ

畑ゝ山ちのこゝ岡ゝ分ゝ所ゝ所ゝ。はひとゝ玉のを拾　三月の中ゝ山ちの

たる地と也とゝ。三月は花ゝ咲ゝ。春山樹ゝ花ゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]

一村ばかりのまつ山をいとなみ、文の道つゝ一村よりかゝ一歳[illegible]
いろを表一村ばかりのまつ山をいとなみ、はもいとの人のかきをとゝ三月のしかをとゝ
一村ばかりのまつ山をいとなみ、一村の梅をもとゝ、[illegible]
うつき事もしらぬ人はて一村ばかりのまつ山をとゝ
一いきまろかりくるんうこゝろ、[illegible]
一しくの世のくるゝ人をいとゝ山をのさ、[illegible]
本をうしてあるさまにいろのゆをいきまゝ入てゝ
まりて青の年をゝ世ひとゝてゝ[illegible]
ちひろかり。[illegible]
しくしゝ花のゝ花の年をてあり山をを待ゝきく
二月ふりゝ[illegible]

年ゝ[illegible]

[illegible]

一百歌よゝ[illegible]　摂政

故ゝ[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一百歌よゝ[illegible]　西行

[illegible]

是やこの一首すゝきも跡ゝ人逢うあふ月のくしう

[illegible]

寄月述懐　定家朝臣

日ゝ繁に成ぬれば人はいとゝ其ゆかりの庭の跡を訪ひ
そしらとふ事あまりてこゝろ〳〵なれば世間の
めでたく一首のまおひをさかれけり　もとゝはえなまほのゝ花
のきなまさろえ〳〵日間
此一事もあり　おそれも今と昔とかりてきゝ給ふ人の次八
殘なりとぞ思ひとゝ思ひよくゝ

愛　知　県
1105052523

911
イ
2-5-1